

田中王堂のプラグマティズムと経済思想

池尾愛子[†]

Ōdō Tanaka's Pragmatism and its Relationship with Economic Thought

Aiko Ikeo

After studying at Tokyo Senmon Gakkō, Ōdō Tanaka (1867–1932) stayed in the US for more than eight years from 1889, and taught philosophy at Waseda University for more than 30 years. At the University of Chicago, Tanaka was supervised by John Dewey (1859–1952) and trained also by William James (1842–1910, the author of *Pragmatism*) and George Santayana (1863–1952). Tanaka naturally became a pragmatist. Tanaka, like James and Dewey, praised utilitarianism highly, and therefore he paid attention to the development of utilitarianism, political economy, and economics.

In the early twentieth century, several scholars became interested in Sontoku Ninomiya (1787–1856, economic reformer and thinker). Tameyuki Amano (1861–1938, economist at Waseda University) introduced the teachings of Ninomiya into his *Discourse on Thrift and Savings* (1901) and his edited text-book *New Commercial Reader* (1911, 1913). In contrast, Tanaka regarded Ninomiya as a philosopher and authored *A New Study of Sontoku Ninomiya* (1912) by bringing focus into pragmatist, utilitarian, and individualist arguments in Ninomiya's writings. Tanaka carefully examined Ninomiya's concept of "*chūyō* (golden mean, constant mean)," which could serve as the criterion when a spectator questioned if something contributed to the happiness of a person or mankind in the world. Later Tanaka came to realize that Ninomiya's concept of "*suijō* (concession)" should have something to do with Adam Smith's concept of "parsimony."

It is noteworthy that Dewey visited Japan in March and April 1919 and his lectures given at the University of Tokyo became the book *Reconstruction in Philosophy* in 1920. It is also important to remember that Dewey accepted the warm invitation sent by Hu Shih (1891–1962), his former student at Columbia University and a philosopher at Peking University, to visit China and then he spent more than two years on giving lectures at Peking, etc.

With reference of Tanaka's pragmatism, Dewey's 1920 book, and Amano's economics, this paper relates Adam Smith's *Theory of Moral Sentiments* (1759) and *The Wealth of Nations* (1776) with the use of the idea of "contributing to the happiness of mankind." It also argues that Western economic thought has developed from some part of Western philosophy and that Western philosophy and economic thought have deeply connected with Christianity.

はじめに

田中王堂（1867–1932）は東京専門学校等で学び、19世紀の終盤にアメリカに8年以上滞在し、英語圏の哲学の伝統の中で学び、そして哲学者として訓練を受け、帰国後、早稲田大学で哲学を30年以上講じた。本稿では、王堂の哲学を論じ、彼の師であるジョン・デューイ（John Dewey: 1859–

[†] 早稲田大学商学学術院教授

1952)の日本と中国での哲学講演(1919~1921年)を参照し、西洋哲学がキリスト教と深く結びついており、経済思想・経済学が哲学の一部から分離するようにして展開してきているとともに、相互に影響を及ぼしあっている局面があることを示すことを狙いとする。

第1節では王堂のプラグマティズム哲学を、第2節では彼の二宮尊徳研究を検討する。王堂は尊徳の思想の中に、プラグマティズム、功利主義、個人主義を見出し、尊徳を哲学者として称えた。王堂が尊徳にある「中庸」概念に着目したことは、幸福を感じとるさいの判断基準を探していたようで興味深い。第3節ではデューイの東アジア訪問をたどり、彼の『哲学の改造』(1921)から、福澤諭吉(1835-1901)の主張と重なる議論と功利主義に対する評価をみる。そして第4節では王堂の哲学と天野為之の経済学を参照して、アダム・スミス(Adam Smith: 1723-1790)の『道徳感情論』(1759)と『国富論』(1776)を幸福概念で関連づけて議論する。

1. 田中王堂のプラグマティズム哲学

田中王堂は1867年、埼玉県入間郡富岡(現所沢市)に生まれ、本名は喜一、王堂は号。王堂は、中村正直の同人社、東京英和学校(現青山学院)、東京専門学校(現早稲田大学)、京都同志社等で学び、中退した。王堂は1889(明治22)年から8年間アメリカに滞在した。王堂は1893年ケンタッキー・カレッジを卒業して、同年9月に哲学研究のためにシカゴ大学に入学し、翌1894年にシカゴ大学大学院に進学し、博士号取得を目指して3年間研鑽に努めた。この間の指導教授はジョン・デューイで、彼はプラグマティズム、教育哲学で有名であった。王堂はキリスト教の原理と歴史も勉強し、ウィリアム・ジェイムズ(William James: 1842-1910, *Pragmatism*の著者)、ジョージ・サンタヤーナ(George Santayana: 1863-1952)からも学んだ¹。1897年に王堂は日本に帰国し、1898年3月に東京高等工業学校(現東京工業大学)の教授(英語担当)に就任するとともに、東京専門学校の哲学講師となった。王堂は1902年に同校が早稲田大学に再編されたのちも講師を続け、1929年に同文学部教授に就任した。王堂は1932年に手術後に回復することなく他界した²。

田中王堂の哲学は、プラグマティズム(それまでの哲学や諸学問の実践的総合と位置付けられ、対立するものについては結果・帰結で判断する)、人生批評、文献解釈といった鍵概念で表現される。デューイが多くの哲学的観念をジェイムズたちから引き継いだ(全部を受容したわけではない)ように、王堂はデューイやジェイムズから多くの哲学的観念を引き継いだ。そして、王堂がデューイとは大きく異なったのは、王堂が極めて批判精神の旺盛な哲学者であったこと、教育哲学や学校教育の実践課題にデューイほどには情熱的には取り組まなかったこと、王堂が日本語・中国語の文献を研究射程に入れたことなどにあったといえる。王堂は多くの哲学書を読みこなし、ジェイムズ、デューイのプラグマティストと同様に、功利主義(utilitarianism)を高く評価していたので、経済思想・経済学にも関心を寄せることになった。

例えば、教え子の石橋湛山(1884-1973)が東洋経済新報社に就職した後、王堂は次の経済書を読むように助言していた—エドウィン・セリグマン(Edwin R. A. Seligman: 1861-1939, コロンビア大学の経済学者)、J.S. ミル(John Stuart Mill: 1806-1873, イギリスの経済学者・社会哲学者)、天野為之(1861-1938)の経済学である。天野の『経済学綱要』(1902, 漢文訳『理財学綱要』)は、天野自身の『経済原論』(1886)以来の経済学の発展と応用を詰め込んだ書物で、日本の学生向け「マクロ

経済学」と呼びうる内容になっていた³。天野は「経済学とは財の生産、分配、交換、消費を論ずる科学なり」と捉えて、効用、資本の増分（投資）、貯蓄、国際貿易を理論的に考察し、そして通貨・銀行、政策（政府の役割）、財政についても議論した。天野は「効用」（utility）を、「有用性」に近い概念でとらえており、その「有用性」は人間が判断するものと考えていた点で、王堂の功利主義評価と重なってゆく。“Utility”は「功利」や「効用」と訳される一方、「功利」の概念は江戸時代から儒学者により使われてきた。そして、（人間が判断する）「功利」はしばしば、（人間を拘束する、人間が従うべき）「制度」と対置された。天野と王堂は共に明治維新以後の日本の経済と社会の大きな変貌に関心を寄せ、二宮尊徳について著すことがあり、共に儉約・節制（尊徳なら「推譲」、アダム・スミスなら“parsimony”）を重要視していた。経済学者の天野が特に国際貿易とともに銀行業に注目したのは異なり、哲学者の王堂は、幸福、幸福の増進、民主主義の基礎としての個人主義、芸術・アートと、英語圏の哲学・社会思想の展開を反映させて、広範な論題を取り上げて思索・議論を展開した⁴。

王堂は多数の論文を諸雑誌に発表するほか、書籍も刊行した。1911（明治44）年5月に『書齋より街頭に』を出版し、同年9月に『二宮尊徳の新研究』を公刊した。その後、1912年に『哲人主義』、1913年に『吾が非哲学』、1914年に『解放の信条』、1915年に『現代評論選集』第一編として『王堂論集』、『改造の試み』、『福沢論吉』、1917年に『卿等のために代言す』、1918年に『徹底個人主義』、1919年に『国民哲学の建設』を刊行した。1921年に『創造と享楽』、1923年に『救は反省より』、『王堂女性観』、1924年に『象徴主義の文化へ』、1925年に『改訳の哲学』、1929年に『現代文化の本質』を出版した⁵。

王堂没後、占領期の1948-49年に、『徹底個人主義』、『福沢論吉』、『ヒューマニスト二宮尊徳』、『西哲群像』が、『田中王堂選集』全4巻として再版された。2010年には、北村実の編集により『田中王堂著作集』（全6巻）が出版された。本節の残りでは、『田中王堂著作集』から、王堂のプラグマティズム哲学のうち経済思想に関連する部分を中心に拾いあげることとする。

王堂は、1911年の最初の著書『書齋より街頭に』において、「哲学の将来」を考察し、哲学と科学とのあいだに緊張関係があるとの認識を示し、「哲学と科学とは、人生に対しておおいに異なる役目を有している」としながら、過去2〜3世紀において、科学が「人生に光明と幸福とをもたらしてきた」ことを認めた⁶。

プラグマティスト王堂は哲学的考察の軸を「生活」「人生」におき、「人間の欲望」にスポットをあて、「欲望と境遇の調和」を論じてゆく。「現実生活」に接近して「人間の欲望」にスポットをあてられるようになったのは、ルネッサンス（文芸復興）以降のことであり、19世紀の心理学の展開がこの傾向を後押しし、プラグマティストが登場して貢献し始めたわけである。「幸福の増進」を人間の最終目的ととらえるのは、西洋哲学のより長い伝統のなかにある。王堂は、ジェイムズ、サンタヤーナ、デューイがそろったシカゴ大学で哲学の訓練を受けてきたのであった。

王堂は哲学の役割について『書齋より街頭に』で次のように述べる（現代文に近づけた、以下同様）。

「生活するということは人間の有する唯一の目的たるには相違ないが、彼はそれを達するに多数にして、かつ断えず編成する欲望にたよっている。ここに方便たる欲望を正しく生活の目的に適

合せしめて行くには二重の努力をようすることとなる。それは同時に起こる欲望の関係を調和することと、前後に続く欲望の様式を斉整することとである。そして調和し、斉整する方と、調和され、斉整される方とは、共に無数の段階を造って居るが、最後の段階においては、調和され、斉整される側面を代表するものは、常識や、科学であって、調和し、斉整する側面を代表するのは哲学である。」⁷

王堂は、「常識と科学との上に、哲学がなければならぬ」、その理由は「常識と、科学とは如何に人生に大切なものであっても、個々の欲望や、活動を代表して、生活全体を代表せず、生活全体の利害の上より打算して、個々の常識と、個々の科学とを調和し、斉整するのは独り哲学であると思われるからである」とした⁸。さらに、「現実を大所から見ながら、現実を超越せず、現実に触れながら、現実埋没せず、絶えず反省の源泉となり、動力となって、現実と漸近的な関係を保ちつつ、永久に進むのが将来の哲学の職分でなければならない」とする⁹。また、「将来の哲学は広義における人生批評であらねばならぬ」としたうえで、王堂はプラグマティズムが一層の高い実用の見地より、心理学と論理学の成果を取り込んで、人生を批評すると考えるのであった¹⁰。

王堂は『哲人主義』上(1912)では、「現代生活の意義」を考察して、「人間はより一層の多くの欲望を求めてきて」、一方で科学と工業の勃興により「自然の征服」となって、他方で芸術と道德の改革により「自己の主張」となって現れてきたと整理した。そのうえで、王堂は「人間の生活」、「人間の思想・思考と行為」について議論を展開した。

「人間の生活はその特徴よりして、永久に彼の欲望の欲求と、自然の境遇の条件とを斉整することに帰するのであるから、人間が生活することによって自己を開放する道は、ただ段々に欲望の価値を意識し、できるだけそれを外界に実現するために、これが方便として自己の力量を増してゆくの外にはない。してみると、自己を主張するということと、自然を征服するということとは、ただ人間が本来彼に付与された方便によって自己の存続および発展を計っているということに過ぎないから、ただ事実を事実として取るときは、この中に少しも非難さるべき要素が含まれているとは思われない。」¹¹

このように王堂は、現実を直視して、事実を重んじて、人間中心の考察を展開するのであった。

哲学者の王堂は『吾が非哲学』(1913)では、自分には、功利主義者であろうとする *tough mind* と、美に憧れるロマンチストであろうとする *soft heart* が併存していると述べている¹²。『田中王堂著作集』第5巻には「文芸の目標」と題してロマンチスト王堂の論説が収録されているが、本稿では、王堂の功利主義的論説に注目していくことにする。

王堂は『解放の信条』(1914)において、「最大多数の最大幸福」が人間の理想であり目的であると明快に主張する一方で、明治維新以降の日本での大きな変化に対して考察を加えている。もちろん、ベンサム「道徳および立法の諸原理序説」(1789)は同書でもそれ以外でしばしば言及され、J.S. ミルの「功利主義」(1861)に対してはいつそう高い評価が与えられている。

「人間のこころみるあらゆる努力、人間の企てるあらゆる計画、人間の創めるあらゆる設備は、つまり最大多数の最大幸福を実現しようとするほかに一つの目的をも有せざるものである。」¹³

「わが国において、最大多数の最大幸福を実現しようとするならば、如何に過去の習慣と制度とを保留し、如何に現在の刺激と材料を採取すべきかは、全く堅固にして神聖なる国民性を標準として始めて決まることである。

最大多数の最大幸福を増さんがためには国民性は如何なる変化を取り、如何なる方向に走るもとより懸念すべきことではないが、しかし、変化が余りに急激であり、方向が余りに斬新であるならば、国民性は必ず攪乱と混迷とに陥るおそれがある。」¹⁴

王堂も同時代の日本人たちもダイナミックな変化を直視していて、変化を後押しするような考察を加えているため、どちらかといえば定常状態（ゼロ成長）に向かう経済を展望していたミルと異なり、後述するアダム・スミスの『道徳感情論』（1759）での議論との類似性が現れていることが興味深い。「人間の幸福」、さらには「最大多数の最大幸福」を考察してそれを実現するために、科学と応用科学が貢献できる可能性があった。

ここで日本特有の問題が入り込む。幸福の実現に向けて、「近代の学問と産業が等しく実験によって発達してきたこと」は、日本でも「理論」として知られている¹⁵。しかしながら、王堂は教育現場で実験の重要性が忘れられていて、「学科と生活の分離」が起こっていることを憂えている¹⁶。王堂は『創造と享楽』（1921）において、「芸術も、科学も、その他の多くの機関も、その初め、ことごとく、宗教より分化したものである」ことも強調している¹⁷。王堂が宗教を語るとき、キリスト教徒が宗教を語るときと同様に、それはまずキリスト教をさす。

王堂は、福澤諭吉を称賛したものの、明治維新以降の性急な西洋文明の摂取には批判的である。王堂は民衆の利益と幸福を見通せる「哲人」の存在を切望した。王堂は『哲人主義』上（1912）において、哲人の資格を明らかにした。

「一、哲人は現代の理想を樹立するために、絶えずその事相に接即することを怠らない。

一、哲人は民衆の意思を建設するために、絶えずその欲求を参照することを忘れない。

もし社会生活がそれを組織する民衆の利益と幸福とのために造られているものであって、そしてそれらすべての民衆に共通する利益と幸福とを発見する聡明と、それを実現する力量とを有することは、決して自分一個の利害の考にのみ限られる民衆のよくする所でなくして、独り彼らの欲求を基礎としながら、それを選択し、具体化して実現することのできる哲人…はいかなる社会においても必要欠くべからざる人物といわねばならぬ。」¹⁸

王堂の意図には反するであろうが、これは「聡明な独裁者」の存在を切望するものであると換言することが可能である。こうした哲人に関する議論につづいて、文明の進捗と幸福の増加を図る議論が展開されたのち、王堂の明治維新批判につながられていくのである。

2. 田中王堂の二宮尊徳研究

20世紀初頭、二宮尊徳は早稲田大学関係者たちを中心にブームになっていた。いち早く二宮尊徳に注目したのは、天野為之であった。講義ノートを基にして出版した『経済原論』（1886）以降、天野の経済学は、尊徳の教義（推譲や仕法）を経済学の中に取り入れて、「東西文明の融合」を実現するように進化を続け、彼の『経済学綱要』（1902、中国語版『理財学』）はマクロ経済学の姿に近づいていた。天野の『勤儉貯蓄新論』（1901）は江戸時代の尊徳の教義を、制度変化などを考慮に入れて明治時代用にアップデートしたものであった。天野為之編『実業新読本』（1911）第4巻の第56-57課に「二宮尊徳の少時（一）（二）」、第58課「報徳教（漢文）」（中村正直）が収録された。1912年に、富田高慶著『報徳記』（1883）の英訳が、東京高等商業学校（現一橋大学）とオックスフォード大学で学び、早稲田大学で英語を教えたことのある好本督（1878-1973）により、*A Peasant Sage of Japan: The Life and Work of Sontoku Ninomiya* と題してイギリスで出版された。同じ年、カナダのR. C. アームストロング（Robert Cornell Armstrong: 1876-1929）による『夜明け前：二宮尊徳の生涯と教訓』が、英語で書かれた最初の尊徳伝として公刊された¹⁹。

田中王堂は1911年9月に『二宮尊徳の新研究』を出版した。経済学者の天野為之は富田高慶著『報徳記』（1883）等を読み、尊徳の神道的要素に気づき、尊徳の勤労・分度・推譲に近代的な経済学につながる要素を見出していた²⁰。それに対して、哲学者の田中王堂は、経済学的解釈を猛烈に批判しつつ、福住正兄著『二宮翁夜話』（1893）を読み、尊徳に、プラグマティズム（実践、実験を含む）、功利主義、中庸、個人主義、重農主義等を見出した。王堂は原典の「解釈」はもとより「改釈」でもよいとした。王堂の『二宮尊徳の新研究』は1948年に石橋湛山の序を添えて再版された。石橋は、「二宮尊徳に関する著述は…、多数に上るにもかかわらず、明治四十四年田中王堂先生の『二宮尊徳の新研究』が現れるまで、彼の思想の真価を明かにする者がなかったことは、如何に我が思想界に思想がなかったかを示すものである」（現代文に近づけた）とした。

本節では、田中王堂『二宮尊徳の新研究』から要点を引用して現代文にしておこう。なお傍点は全て引用者によるもので、頁は『田中王堂選集』、第3冊「ヒューマニスト二宮尊徳」（1948）に従うことにする。

まず、王堂自身が、尊徳を絶賛した文がある。王堂いわく、「二宮尊徳によって唱えられた学説は、確かに我が国の過去の文明と機運とが産出した最も大なるものの一つである。否、それはただに過去における一つの大なる産物であるのみならず、また、其れが正当に研究せられ、正当に鑑賞せられさえすれば、現代においてでもなお一つの大なる暗示となり得るものである。しかし不幸にしてまだ一度もそうされたことのないがために、その志向と、意義と、価値とは今日にいたるまで全く草莽の中に遺棄されている。」²¹

さらに王堂は、「独自に真理を創設するものを哲学者と呼ぶ」のであれば、尊徳は厳然たる哲学者であるとする——「尊徳はただに徳川時代を通じてのみならず、古今東西を通じてたしかに卓然一家をなせる立派な学者であり、哲学者であったといわねばならぬ。…私は最も忠実に彼の意見を載録したと思われる『二宮翁夜話』によってかく断言するのである。」²²

第2に、王堂は、「二宮尊徳は最高最新の意味において（今、世上に行われている言葉を用いれば）ヒューマニズムの人であった」とする²³。その理由は、次のとおりである——「彼の説くところは多岐、

多葉であるが、…政治にしても、宗教にしても、学問にしても、すべてそれらのものの役目は人間の生活を助長するという一事に帰することを忘れない。実に尊徳の事業の時流に超越した所以のものは、彼がすべての場合、すべての時代を通じて、人間の欲望と、目的と、可能とは何であるかと推究し、そして何人にも優って明快に切実にこの問題の鍵をとらえたためである。」²⁴

第3に、王堂は、尊徳の学説は、実験的、功利的、平民的であったとする——「彼が最も多くの力を用いて貨殖を説いていることは事実である。又理財と修身との関係の親密なることを説いているのも事実である。しかし彼の見地よりすれば、あらゆる意味において幸福なる生活、あるいは充実せる経験は、ひとり衣食の充実せる生活によってはじめて需用せられるものと考えられたからである。…彼の学説を通じて最も顕著なる特徴をなしているものは、それが飽くまでも実験的であり、功利的であり、平民的であつたことである。」²⁵

王堂は関連して、自己の主張する「欲望と境遇の調和」を尊徳に見出した。「二宮尊徳は生活を統一する方法として境遇の支配と、欲望の整頓に等しく意をとどめることの必要を説いたのである。」²⁶ 王堂の「欲望の整頓」は「欲望の順序付け」とみなしてよい。

第4に、王堂は、尊徳が人間と下等動物との違いを論じたことに注目し、人間は幸福を享受し、自然を変更し、社会を構造することを論じ、幸福、中庸、徳にも注意を注いだ——「人間は一方に自然を変更し、他方に社会を構造して、動物の知らざる努力を運用すると同時に、又彼らの知らざる幸福を享樂して居るのである。尊徳が到る處説くこと忘れざる労作、分度、推譲、貯蓄、中庸等の諸徳は皆人間が生活を持續するために天然を変更し、社会を構造するという二つの根本事実に含蓄され、後に発展した要素に他ならない。」²⁷

第5に、王堂は、中庸の概念をさらに見出す。中庸は分度に通じ、アダム・スミスの和訳書にも何度か登場する（後述）。

「健全なる生活は欲望…の権威を認めながら、ある程度まで其れを誘導するにあるとしても、其れを適當にするには如何なる標準があるかと問うて来ると、其れは中庸を守るにあると彼は答えるのである。」²⁸

「多少欲望の性質が解かって来るや否や、長き経験によって、中庸が結局生活に一番多く満足と平和とをきたす方針であることが人間によって発見された。それ故にかなりな文明に達した国民には、必ずある形において中庸の教訓が説かれたのである。」²⁹

「實際上の中庸になると、生活を維持し、発展する必須の条件であつたから、静的にはとにかく、動的にはたいていの人々は生ける興味をもってだいたいそれを守ってきたのである。人間は有限なる資力をもってしては、彼の欲望の間に矛盾が生じた時に、これをどうにか調和する道はただ中庸だけである。尊徳が中庸を容易いとするのは、多くの人が多くの場合に生活していた方針を採って、それを中庸とみなしたからである。」³⁰

「中庸が人間として自己を充足し、発展するに必要な方法であるならば、その作用は消極的であると同時に積極的でなければならぬ。」³¹

中庸は、変化のある世界において、幸福を感じるか感じないかの基準になるといえる。

第6に、王堂は、尊徳が、善悪は人間の生活上の利害関係より判断されるべきであり、人間の欲求に関係して定まる点に注目する。英語の“goods”は「善」と「財」の意味を持つことに注目したい。

王堂は、『夜話』から引用した——「此人体よりして、米を善とし莠（はぐさ）を悪とす。食物になると、ならざるを以てなり。…然るにただ食うべきと、食うべからざるををもって、善悪を分つは、人体より、出たる、癖道にあらずして何ぞ」（巻の三、百十四）。その上で、王堂は次のように主張した——「善悪ともにもの自らに具はる性質と一般に考えられていた時代にあつて、善悪はすべて人間の欲求に関係して定まるものである。人間を離れて全く善悪はないということを宣言したのは驚くべき見識といわねばならぬ。」³²

このように王堂は、善と幸福に注目し、尊徳に改めて功利主義を見出してゆく。「彼の意見に従えば、人間の幸福は此の二つ〔劳作と分度・蓄積〕のことを適當になすことによつてのみ得られ、そうでなくては、如何なる方法によつても決して得られるべきものではないからである。」³³

第7に、王堂は、尊徳に個人主義があるとした。また、欲望は足し合わせることができる（功利主義）とも考えていた。『夜話』から、「天地間我なければ、物無きが如くなればなり。」（巻の四、百七十）を引用して次のように続けた。

「苟くも天地間に生をうけたものは皆等しく己れが生存に対して絶対の権利と権威とを有している。ここに尊徳が当時においては驚くべきほどの知見をもつていいあらわしている如く、実に『天地間我なければ、物なき』が故に、この我身は天地間に二つなき尊きものである。それであるから、万有及び社会の中には強大なるものも、莊嚴なるものも、美麗なるものも、幽玄なるものも無限に存在するが、これらは皆人間に生活するという欲望があつてはじめて発見され、または創設されたに過ぎないのである。そして人間の欲望といへば、無論人類を形造る各個人すなわち老幼、貴賤、賢愚、男女にあつて、中に潜み、外に現れたる欲望の総計に他ならぬのである。」³⁴

それゆへ、王堂は、幸福への道は、対立する欲望を比較して、自己の満足を計る必要があると考えたのである。「幸福なる生活を作る道…私生活において、長い間の利益に鑑みて、矛盾する欲望の間の調和を図ることが必要であると同時に、公生活においても広き榮辱、得失の立場より、自分と他人との間の欲望を具体化することが必要である。…實際、世の中に生活する個人は自分の満足を計っておらないものは一人もない。」³⁵ 王堂は、「二宮尊徳は個人主義の人であつた」と結論するのであつた³⁶。

第8に、「自然の勢力の選択と理想的な変更」は科学に通じている。応用科学の成果はデューイも注目した。「人間は自然の勢力を選択しかつ理想的に変化させて、初めて自己の欲求を満たす道具となすことができるのである。」³⁷

第9に、王堂は、尊徳の生活は価値判断と選択からなるとする。王堂いわく、尊徳の「生活は現代の言葉を用いれば価値の判断と選択とに他ならない。」³⁸

第10に、王堂は、実験と帰納に重きをおいて、プラグマティズムの立場に通じると考えた——「彼の理論…はその精神においてあくまで積極的であり、進取的である…前者〔理論〕は既に実

験と帰納によって立つ新時代を暗示している。」³⁹

3. ジョン・デューイと東アジア

ジョン・デューイ (John Dewey: 1859-1952) の研究活動は、著作の出版時期を基準に3つに分けられている——初期 (The early works of John Dewey, 1882-1898), 中期 (The middle works of John Dewey, 1899-1924), 後期 (The later works of John Dewey, 1925-1953)。田中王堂はシカゴ大学で、初期デューイに習ったのは事実で、中期デューイの仕事にも目を通していたことは確実である。デューイは初期には宗教や心理学に関する論文を中心に発表していた。デューイは1904年にシカゴ大学を辞職し、1905年にニューヨークのコロンビア大学に着任した。中期のデューイが研究休暇中の1919年3~4月に、渋沢栄一の資金援助を受けて夫妻で来日し、新渡戸稲造邸に宿泊するなどの歓待を受け、田中王堂との再会もはたす⁴⁰。初の世界大戦終了直後の来日になり、科学的研究の成果が大戦の中で応用されており、大戦は以前に比べて戦争のイメージを一変させていて、哲学者に対してもその哲学観の変更を迫っていたのであった。

デューイは東京帝国大学 (現東京大学) で「現在の哲学の位置——哲学改造の諸問題」と題して8回の連続講義を行った。その原稿は1920年に *Reconstruction in Philosophy* と題して出版され、1921年4月には、中島慎一訳『哲学の改造』が、同年12月には千葉命吉による和訳が同題で出版された。現在では、清水幾太郎・清水礼子訳『哲学の改造』、河村望訳『哲学の再構成』が容易に入手可能である。繰り返しになるが、初めての世界大戦は哲学者たちに大きな課題を突き付けていた。デューイは日本人哲学者たちと議論をして意欲的に東大講義に臨んだのであった⁴¹。

デューイの『哲学の改造』(清水幾太郎・清水礼子訳)の章タイトルは次の通りである。

- 1 哲学観の変化
- 2 哲学の再構成における幾つかの歴史的要因
- 3 哲学の再構成における科学的要因
- 4 経験観念および理性観念の変化
- 5 観念的なものと実在的なものの観念の変化
- 6 論理学の再構成の意義
- 7 道徳観念の再構成
- 8 社会哲学に関する再構成

第1章から第3章では、西洋の哲学を歴史的にたどりながら、科学技術の進歩と産業革命の進行が着目された。後段において、産業面で旅行・探検・貿易の影響が強調され、功利主義が高く評価されたので、経済学や経済史と重なることになった。デューイの講演の中に、田中王堂の主張だけではなく、福澤諭吉の主張と重なるものもあった⁴²。

「一方において、近代産業というのは、同時に応用科学なのである。…数学、物理学、化学、生物学の進歩が必要条件であった。実業家は、科学者が自然の隠れたエネルギーについて得た新しい知識を、種々の技術者を通じて手に入れ、それを利用した。近代の鉱山、工場、鉄道、汽船、電信、あらゆる生産の器具や装置、輸送などは、科学的知識を表現するものである。…蒸気と電

力による産業革命は、ベーコンの予言に対する答えである。

他方において、近代産業の必要が科学的研究にとって大変な刺激であったというのも、同じように真実である。…事業で得た富の或るものが研究の資金に廻された。科学上の発見と産業上の応用との不断の広範な相互作用が、科学および産業の双方を豊かにし、科学的知識の神髄が自然的エネルギーの支配にあるという事実を当時の人々に教えた。自然科学、実験、支配、進歩、これら四つの事実は、分かち難く結ばれ合っていた。」⁴³

さらに、デューイが第5章で電信・電話に、第6章で機関車に注目したことも、通信・交通手段の変化に注目した福沢を彷彿させる。第4章では、「人間はホモ・ファーベルである」と主張したアンリ・ベルグソン（Henri-Luis Bergson: 1859-1941）を紹介した。研究者たちが道具を使う人々と恒常的に接触するようになったことが、産業革命とよばれる大変化をもたらしたと捉えられた。デューイは第8章で、実験、利己心、競争についての議論を展開した。前後するが、第7章ではデューイは功利主義を次のように称賛した。

「功利主義は、目的や善に関する古典的理論から現在の可能なる理論への転換において最良のものを示した。功利主義には、明らかな長所があった。それは、曖昧な普遍性を捨てて、特殊な具体的なものの研究へ進むことを主張した。人間を外的な法則に従わせるのではなく、法則を人間の幸福に従わせた。制度が人間のために作られたのであって、人間が制度のために作られたのではないと教え、諸般の改革を積極的に進めた。それは、道徳的な善を自然的なもの、人間的なものたらしめた。生活の自然的な善と調和させた。…とりわけ、それは、最高のテストとしての社会的福祉の観念を人間の想像力のうちに植えつけたのであった。…功利主義は、…固定的な、究極的な、最高の目的という観念を一度も疑ったことがなかった。…功利主義は、快樂および快樂の最大量を固定的目的の地位に就かせたのである。」⁴⁴

『20世紀の経済学者ネットワーク』（1994）でみたように、1920年代前半に、功利主義をめぐる論考が日本語でいくつか発表されるが、デューイの東京講演や『哲学の改造』の和訳の出版が影響した可能性がある⁴⁵。

デューイは日本滞在中に、コロンビア大学での教え子だった胡適（Hu Shih: 1891-1962）らから熱烈な招待状を受け、夫妻で中国を訪問することを決意し、1919年5月1日に上海に到着した。デューイはコロンビア大学の許可を得ながら中国滞在期間を延長し、2年2か月余り滞在したのであった。デューイの講義の一部の中国語訳が『杜威五大講演』と題して1920年に出版された。杜威（トゥウェイ）はデューイの名前の中国語表記である。講義の英文原稿は残っておらず、1970年頃になって、ホノルルに残っていた中文版が検討され、講義の一部が改めて英訳された。1973年に、「社会・政治哲学」と「教育の哲学」についての講義がR. CloptonとTsuin-chen Ouにより、*John Dewey: Lectures in China, 1919-1920*と題して出版された⁴⁶。

また、東京での講義に一学生として出席していた永野芳夫が『杜威五大講演』の翻訳権を確保していた。永野は、中国語版からの和訳を3自著（1947～49年）に収録していたのだが、1975年に大浦

猛によってまとめられて『デューイ 倫理・社会・教育：北京大学哲学講義』として出版された。

『杜威五大講演』の英訳と和訳、『哲学の改造』（1920）を比べると、デューイは中国では、東大での講義原稿を使わなかったことがわかる。中国での「社会・政治哲学」講義は、東大での講義内容より、西洋哲学により近づきやすい入門講義になっている。そして、中国での講義には、中国人哲学者たちとの議論が反映されている箇所がかなりある。

デューイの北京講義には、「3人の同時代の哲学者」（ウィリアム・ジェイムズ、バートランド・ラッセル、アンリ・ベルグソン）もある。ジェイムズはデューイがシカゴ大学にいた時の同僚で、『プラグマティズム』（1907）の著者である。*John Dewey: Lectures in China, 1919-1920*（1973）の付録には、上に紹介した以外の講義の英文概要が収録された。

4. アダム・スミス『道徳感情論』と『国富論』の関係

本節では、田中王堂のプラグマティズム哲学と天野為之の経済学・実業教育を参照して、アダム・スミスの『道徳感情論』（1759）と『国富論』（1776）を関連づけて検討する。19世紀の終盤に英語圏の哲学の伝統の中で訓練されて、帰国後、哲学者として活躍した日本人は少ないだけに、王堂の著作は（今となっては）貴重である。

天野は『実業新読本』全5巻を通して、交通・通信の革命的進歩、国際貿易の重要性を堂々と語り、「堪能なる技術家、老練なる職工の養成」にも注目した。第1巻と第2巻では、科学技術における発明が利用されてまずは生産現場や通信・交通手段を変化させ、そして新しい消費財の形で商品化されたり通信・交通サービスが商業化されたりして、私たちの生活を大きく変化させていくことが示唆された。天野の主張を要約すれば、「発明が社会を物質的に進歩させ、貿易が世界を変える」となるであろう。これは、スミスが『国富論』（1776）で描き出したものの後に実際に展開した世界である。スミスの政治経済学（political economy）の中で、変化してゆく世界を積極的に創り出してゆく主体は、儉約・節制に励んで事業を展開する商工業者たちであった。それは日本では江戸時代、海外との貿易が極端に制限されていたうえ、士農工商の身分制度が布かれて、低い階級におかれていた人々であった。

スミスの『道徳感情論』と『国富論』も大学での講義を基にして書かれたものである。スミスは道徳哲学の書『道徳感情論』の第1部「行為の適否について」の第1篇「適否の感覚について」の冒頭で、「人間というものをどれほど利己的とみなすとしても、なおその生まれ持った性質の中には他の人のことを心に懸けずにはいられない何らかの働きがあり、他人の幸福を目にする快さ以外に何も得るものがなくとも、その人たちの幸福を自分にとってなくてはならないと感じさせる」と始めて、共感や感情移入について説明した⁴⁷。幸福は西洋哲学の伝統にある大切な感覚である。同第2篇「さまざまな情念が適切とみなされる度合いについて」の冒頭において、「中庸」が登場する。「自分自身にとくに関係のある事柄によってかき立てられた情念 [passion] の場合、その適切さ、すなわち観察者 [spectator] が同調できるような度合いは、明らかにある種の中庸 [mediocrity] に存在する。」⁴⁸ただ、中庸には“mediocrity”のほか、幾つかの英語表現——“a sort of middle”, “the middle and most usual form”, “moderation”——が対応している⁴⁹。中庸つまり「ふつうである」との感覚は、幸福を感じられるか感じられないかと感覚にうったえるときに基準になってくると思われる。

第2部「価値と害悪、すなわち報いる対象と罰する対象について」では、「効用」、「快樂と苦痛」、「偶然」が登場し、人間の社会性が強調された——「社会の中でしか生きられない人間は、自分の置かれた状況に適応するように、自然によってつくられている。…助け合いが愛情や感謝や友情や尊敬の気持ちから行われるなら、その社会は繁榮し幸福であろう。そのような社会の成員はみな愛と好意の心地よい絆で結ばれ、いわば相互の善という重心に引き寄せられている。」⁵⁰

第3部「自分自身の感情と行動に関する判断の根拠について、および義務感について」の第3章「良心の影響と権威について」では、スミスは「他人の幸福や不幸が何らかの点で自分の行動に懸かっている場合には、利己心の命ずるがままに大勢の利害より自分の利害を優先する、といったことは取ってしないものである」、「幸福とは、心の平穏と楽しみの中にある」とした⁵¹。そして、「真の幸福がよりどころとする快樂は、現在の境遇で得られる快樂、すなわちささやかではあるがつねに手近にあって確実に手に入る快樂とほとんどいつも同じなのである」というときには、「中庸」が感じられる⁵²。第4部では効用が広義に議論され、「見えざる手」の働きも登場する。

スミスは『道徳感情論』（1759）では「利己心」にまつわる諸説について議論するにとどまっていたが、『国富論』（1776）では、利己心は人々の幸福の増進に貢献すると確信するようになっていた。幸福の増進につながる可能性のある変化をもたらすのは、商工業者たち（artificers と merchants, manufacturers が入る場合もある）であった。スミスは第2編「資本の性格、蓄積、利用」では、「資本は儉約によって増加し、浪費と無謀な経営によって減少する（Capitals are increased by parsimony, and diminished by prodigality and misconduct.）」、「生産的労働ではなく儉約が、資本の増加をもたらす直接の要因である（Parsimony, and not industry, is the immediate cause of the increase of capital.）」と論じた⁵³。“Parsimony”はふだんはあまり使われない英単語であり、英語母語話者にも奇異に感じられているが、スミスの議論の要の一つになっている。スミスの政治経済学では商工業者たち（による蓄積と競争）が幸福の増進につながりうる変化をもたらし、農村の発展にも寄与するのであった。スミスは商工業の展開に大きな期待をよせていた——「商工業を担う都市が発展し、豊かになった」、「商工業が発達すれば、秩序と善政が徐々に確立し、それとともに個人が自由と安全を得られるようになる」⁵⁴。

第4篇「経済政策の考え方」において、スミスは世界情勢を展望し、国際貿易が活発になりうる可能性を探っていた。中国や日本に関する情報、イギリス・オランダの東インド会社の動向、植民地経営の経費の上昇をみていた。歴史的記述もあるが、当時の現状分析を展開したといつてよい。スミスが、「貿易が行われておらず、高級品を作る製造業もない国では、領主は所有地の生産物のうち、農民の生活に必要な量を超える部分と交換して手に入れるものがないので、その大部分を田舎風に気前よく食事などをふるまうのに使う」というとき、「貿易が行われておらず、高級品を作る製造業もない国」に日本も入れられていたかもしれない⁵⁵。スミスはオランダについて、「オランダでは、独占がなければアジア貿易は現状よりはるかに大規模になっているはずであり、資本の一部がその部分にとってもっとも有利な用途から排除されていることで、かなりの損失を被っているはずである」と手厳しく批判しているからである⁵⁶。

スミスは重農主義を批判する文脈においてであるが、自由貿易を推奨する。

「自国で余った生産物の価値を高め、生産量を増やし、それによって自国の土地の改良と耕作を奨励する最善の方法は、すべての商業国の貿易に完全な自由を認めることである。

貿易の自由を完全に認めれば、自国に不足している商工業をいずれ確保し、国内産業の重要な部分の不足をもっと適切に、もっとも有利に埋めていく最善の方法にもなる。」⁵⁷

スミスにとって、自由貿易は世界の幸福の増進を約束するものであり、利己心によって導かれるべきものであった。イギリス人たちの利己心は世界の幸福に貢献しうるのであった。スミスは哲学と経済思想が交錯するあたりに位置する。田中王堂はスミスを読み、スミスに関する議論に目を通し、『象徴主義の文化へ』（1924）において、次のように論評した。

「アダム・スミスは、これより将に科学が産業の方法を革命せんとしていた初頭に立ち、未来において科学が人間の幸福の増進に貢献することの甚大なるべきを予想して、歓喜と希望とに満ちながら、あの『国民の富』の一巻を著わしたのであった。この点において、彼は一個のヒューマニストとして知識と知恵との一致の素直な信者であったのである。しかし、その後の成行はどうであったか。」⁵⁸

王堂が見たとおり、スミスの『国富論』は、貿易がまだ少数の特権者に掌握され、通商に関する条約も結ばれておらず自由港も少ない時期に書かれたものであった。植民地問題は微妙であり、イギリスはアメリカを植民地として独占していたものの、『国富論』初版出版の年に独立を宣言することになる。それでもこのあと、イギリスは「人類全体の幸福を増進する」べく、通商・友好条約を結んでイギリスで生産された製品を積極的に海外に輸出してゆくことになる。競争については、国内での競争と、外国貿易の場面での競争は性格をかなり異にするといいよい。『国富論』は、イギリスが世界に経済進出を始める前夜に、虎視眈々と世界を見据えるイギリス人によって、宗教性を帯びた英語で書かれていたのである。

おわりに

田中王堂は『二宮尊徳の新研究』（1911年、再版『ヒューマニスト二宮尊徳』、1948年）をたいへん心地よく著していた、少なくとも私にはそう感じられた。『田中王堂著作集』全6巻（2010）が利用可能であり、遡って1948-49年には『田中王堂選集』全4巻が出版されていた。王堂研究に着手しかけたときに、商学学術院の八巻和彦教授（現名誉教授）より、王堂の師ジョン・デューイ（シカゴ大学→コロンビア大学）が中国を訪問していたことをうかがい、松尾文夫著『アメリカと中国』（2017）を紹介された。

山岡道男教授に組織委員会の一人としてお手伝いいただいた東アジア国際学術シンポジウム（国学院大学、1995年8月31日と9月1日開催）で、「ジョン・デューイとバートランド・ラッセルが1919年に中国にやって来た」と発表した中国人研究者（Liu Qi）がいた記憶が蘇ってきた。他の中国人研究者たちは誰も、Liu氏の発表に事実の誤りがあるとは言わなかった。彼の“The “New Education” and Chinese Revolution in the 1920s”は私の編集した論文集 *Economic Development in*

Twentieth Century East Asia に収録した。プラグマティズムや功利主義はその時ある程度勉強したが、2 人の西洋哲学者の中国訪問を調査する余裕は当時の私にはなかった。

今回は、1990 年頃にデューイが中国で復活していたことがわかり、デューイの日本・中国訪問に言及し、王堂から西洋哲学における幸福概念の大切さを知り、アダム・スミスの道德哲学と政治経済学を連結させることができた。現在の東アジアにおいて、政策協力における「機能主義 (functionalism)」(プラグマティズムの一部、王堂は「作用主義」と訳していた)、自由な文献解釈に、王堂やデューイの影響が残っているのではないかと感じられるのである。

註

- ¹ “Pragmatism” の語を作ったのは、チャールズ・パースである。
- ² 北村実「田中王堂著作集 解説」、『田中王堂著作集』第 6 巻、495-503 頁、2010 年。
- ³ 天野はミルの『経済学原理』(1848)と、米ハーバード大学のラフリン編集によるアメリカの大学生向け教科書『経済学原理』(1884)を参照した。
- ⁴ Sharon Hamilton Nolte (1948-1987) は石橋湛山研究書 *Liberalism in Modern Japan: Ishibashi Tanzan and his Teachers, 1905-1960* (University of California Press, 1987) でよく知られているが、田中王堂の研究が最初であった。“Industrial Democracy for Japan: Tanaka Ōdō and John Dewey” (*Journal of the History of Ideas*, 45(2): 277-294, 1984).
- ⁵ 北村実「田中王堂著作集 解説」、『田中王堂著作集』第 6 巻、495-503 頁、2010 年。
- ⁶ 『田中王堂著作集』第 1 巻、7 頁、『書齋より街頭に』、27 頁。
- ⁷ 同上、9-10 頁、『書齋より街頭に』、29-30 頁。
- ⁸ 同上、10 頁、『書齋より街頭に』、30 頁。
- ⁹ 同上、14 頁、『書齋より街頭に』、34 頁。
- ¹⁰ 同上、15 頁、『書齋より街頭に』、35 頁。
- ¹¹ 同上、第 2 巻、8-9 頁。
- ¹² 同上、第 1 巻、220 頁。
- ¹³ 同上、第 4 巻、186 頁。
- ¹⁴ 同上、第 4 巻、190-191 頁。
- ¹⁵ 同上、第 6 巻、192 頁、『救は反省より』、1923 年、46 頁。
- ¹⁶ 同上、第 6 巻、189 頁、『救は反省より』、1923 年、31 頁。
- ¹⁷ 同上、第 6 巻、145 頁、『創造と享楽』、1921 年、353 頁。
- ¹⁸ 同上、第 3 巻、145 頁。なお、「醇化」は「理想的な変更」・「具体化」などと表現した（以下同様）。
- ¹⁹ 池尾愛子「日本の実業教育の源流：天野為之と二宮尊徳の教義」、国際二宮尊徳思想学会北京大会（清華大学）発表、2014 年 10 月 18-19 日。
- ²⁰ 池尾愛子「天野為之と二宮尊徳の教義」、2013 年、「天野為之と『マクロ経済学』の形成」、2012 年、「天野為之と日本の近代化：明治期の経済学者、ジャーナリスト、教育者」、2015 年、「天野為之編『実業新読本』を読む」、2016 年、Aiko Ikee, *A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2014 を参照のこと。
- ²¹ 『田中王堂選集』、第 3 冊、1948 年、8 頁。
- ²² 同上、第 3 冊、5 頁。
- ²³ 同上、第 3 冊、16 頁。
- ²⁴ 同上、第 3 冊、16 頁。
- ²⁵ 同上、第 3 冊、7 頁。
- ²⁶ 同上、第 3 冊、15-16 頁。
- ²⁷ 同上、第 3 冊、22 頁。
- ²⁸ 同上、第 3 冊、67 頁。
- ²⁹ 同上、第 3 冊、68 頁。
- ³⁰ 同上、第 3 冊、76 頁。
- ³¹ 同上、第 3 冊、77 頁。
- ³² 同上、第 3 冊、35 頁。
- ³³ 同上、第 3 冊、40 頁。

- ³⁴ 同上, 第3冊, 108頁。
- ³⁵ 同上, 第3冊, 110頁。
- ³⁶ 同上, 第3冊, 111頁。
- ³⁷ 同上, 第3冊, 23頁。
- ³⁸ 同上, 第3冊, 71頁。
- ³⁹ 同上, 第3冊, 159-160頁。
- ⁴⁰ 見城悌治編『帰一協会の挑戦と渋沢栄一』, ミネルヴァ書房, 2018年。1919年9月, 王堂は高梨たか(渋沢栄一の姪, シカゴ大学大学院で社会学を専攻, 修士号取得, 帰国後日本女子大学教授, 34歳, 孝子と称す)と結婚した(北村実「田中王堂 略年譜」, 『田中王堂著作集』第6巻, 504-505頁, 2010年)。
- ⁴¹ その後, デューイ夫妻は京都, 大阪, 奈良を訪問した。G. ダイキューゼン著, 三浦典郎・石田理訳『ジョン・デューイの生涯と思想』, 清水弘文堂, 1977年。
- ⁴² 福澤諭吉『西洋事情 初編』, 1866年, 『西洋事情 外編』, 1868年, 『西洋事情 二編』, 1870年。『文明論之概略』, 1875年。
- ⁴³ デューイ, 清水幾太郎・清水礼子訳『哲学の改造』, 岩波書店, 1968年, 42頁。
- ⁴⁴ 同上, 156-157頁。
- ⁴⁵ 池尾愛子『20世紀の経済学者ネットワーク』, 有斐閣, 1994年。
- ⁴⁶ 台湾・国立嘉義大学(National Chiayi University)のJessica Ching-Sze Wangの*John Dewey in China: To Teach and to Learn* (State University of New York Press, 2007)では, デューイの講義・デューイとの議論が中華民国知識人と, 共産党を創設した人々の両方のグループに影響を及ぼし, またデューイと中国人側の双方方向に影響を及ぼしあったことが描かれている。ただ, 表紙の写真にはデューイ夫妻はいても, 胡適が写っていないことが気になる。
- ⁴⁷ スミス, 村井章子・北川知子訳『道徳感情論』, 2014年, 57頁。
- ⁴⁸ 同上, 97頁。Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Liberty Press, 1982, p. 27.
- ⁴⁹ Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Liberty Press, 1982, p.198, p.199, and p.512.
- ⁵⁰ スミス, 村井・北川訳 前掲載, 221頁。
- ⁵¹ 同上, 311頁, 334頁。
- ⁵² 同上, 335頁。
- ⁵³ スミス, 山岡洋一訳『国富論』上, 2007年, 345頁, 346頁。Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume 1, 1981, p. 337.
- ⁵⁴ 同上, 417頁, 420頁。
- ⁵⁵ 同上, 420頁。
- ⁵⁶ スミス, 山岡洋一訳『国富論』下, 2007年, 221頁。
- ⁵⁷ 同上, 261頁。
- ⁵⁸ 『田中王堂著作集』, 第2巻, 284頁, 『象徴主義の文化へ』, 1924年, 196頁。

参考文献

- 天野為之『経済原論』, 富山房, 1886年。複製版, 早稲田大学, 1961年。
- 天野為之『勤儉貯蓄新論』, 寶永館書店, 1901年。
- 天野為之『経済学綱要』, 東洋経済新報社, 1902年。
- 天野為之著, 替鏡訳『理財学綱要』, 上海: 文明編訳印書局, 1902年。国会図書館近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp/>)。
- 天野為之編著『実業新読本』(全5巻)訂正再版, 富山房, 1913年。初版, 1911年。
- 福澤諭吉『西洋事情 初編』, 1866年。『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉『西洋事情 外編』, 1868年。『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉『西洋事情 二編』, 1870年。『福澤諭吉著作集』第1巻収録。
- 福澤諭吉『文明論之概略』, 1875年。『福澤諭吉著作集』第4巻収録。
- 福澤諭吉『福澤諭吉著作集』全12巻, 慶応義塾大学出版会, 2002-03年。
- 福住正兄筆記『二宮翁夜話』, 静岡: 報徳図書館, 1893年。福住正兄筆記・佐々井信太郎校訂, 岩波書店, 1941年。中央公論社, 2012年。Sage *Ninomiya's Evening Talks*, tr. by Isoh Yamagata, Westport, Conn.; Greenwood Press, 1937.
- 池尾愛子『20世紀の経済学者ネットワーク』, 有斐閣, 1994年。
- 池尾愛子「天野為之と『マクロ経済学』の形成—経済学史上の再評価」, 『早稲田商学』, 早稲田大学商学部, 第431号, 645-683頁, 2012年3月。
- 池尾愛子「天野為之と二宮尊徳の教義: 推譲, 仕法, そして経済教育」, 『報徳学』, 国際二宮尊徳思想学会, 第10号, 45-60頁, 2013年。

池尾愛子「天野為之と日本の近代化：明治期の経済学者，ジャーナリスト，教育者」，『早稲田商学』，第 441/442 号，313-329 頁，2015 年。

池尾愛子「日本の実業教育の源流：天野為之と二宮尊徳の教義」，国際二宮尊徳思想学会北京大会（清华大学）発表，2014 年 10 月 18-19 日。改訂版『二宮尊徳思想論叢』（国際二宮尊徳思想学会，2014），IV「報徳思想と現代社会」，2018 年，104-119 頁。

池尾愛子「天野為之の編『実業新読本』を読む一発見，国際貿易，福澤論吉」，『早稲田商学』，第 445 号，45-70 頁，2016 年 3 月。

池尾愛子「J. デューイの実用主義と田中王堂の二宮尊徳研究」，国際二宮尊徳思想学会曲阜大会（曲阜師範大学）発表予定，2018 年 10 月 20-21 日。

見城悌治編『帰一協会の挑戦と渋沢栄一』，ミネルヴァ書房，2018 年。

北村実「田中王堂著作集 解説」，『田中王堂著作集』第 6 巻，495-503 頁，2010 年。

北村実「田中王堂 略年譜」，『田中王堂著作集』第 6 巻，504-505 頁，2010 年。

松尾文夫『アメリカと中国』，岩波書店，2017 年。

二宮尊徳『二宮尊徳』（児玉幸多責任編集，「日本の名著」第 26 巻）中央公論社，1970 年。

富田高慶著，佐々井典比古訳注『補注 報徳記』（上下）（改版）（現代版報徳全書 1-2），一円融合会，1954 年。初版，1883 年。

A Peasant Sage of Japan: The Life and Work of Sontoku Ninomiya, tr. by Tadasu Yoshimoto, London, New York, Bombay, and Calcutta: Longmans Green and Co., 1912.

田中王堂『書斎より街頭に』，広文堂書店，1911 年。

田中王堂『二宮尊徳の新研究』，弘文堂書店，1911 年。再版『ヒュウマニスト二宮尊徳』（序 石橋湛山），関書院，1948 年。

田中王堂『哲人主義』上下，広文堂書店，1912 年。

田中王堂『吾が非哲学』，敬文堂，1913 年。

田中王堂『解放の信条』，栄文館書店，1914 年。

田中王堂『王堂論集』，『現代評論選集』第一編，1915 年

田中王堂『改造の試み』，新潮社，1915 年。

田中王堂『福澤論吉』，実業之世界社，1915 年。

田中王堂『卿等のために代言す』，広文堂書店，1917 年。

田中王堂『徹底個人主義』，天佑社，1918 年。

田中王堂『国民哲学の建設』，天佑社，1919 年。

田中王堂『創造と享楽』，天佑社，1921 年。

田中王堂『救は反省より』，実業之日本社，1923 年。

田中王堂『王堂女性観』，小西書店，1923 年。

田中王堂『象徴主義の文化へ』，博文館，1924 年。

田中王堂『改訳の哲学』，聚芳閣，1925 年。

田中王堂『現代文化の本質』，東洋経済新報社出版部，1929 年。

田中王堂『田中王堂選集』，第 1 冊「徹底個人主義」，関書院，1948 年。

田中王堂『田中王堂選集』，第 2 冊「福澤論吉」，関書院，1949 年。

田中王堂『田中王堂選集』，第 3 冊「ヒュウマニスト二宮尊徳」，関書院，1948 年。

田中王堂『田中王堂選集』，第 4 冊「西哲群像」，関書院，1949 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 1 巻「哲学・倫理・科学は何のために」，学術出版会，2010 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 2 巻「生活と知識・学問」，学術出版会，2010 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 3 巻「個人こそ社会・政治の原点」，学術出版会，2010 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 4 巻「文明の進歩，社会の改造」，学術出版会，2010 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 5 巻「文芸の目標」，学術出版会，2010 年。

田中王堂（北村実編集）『田中王堂著作集』，第 6 巻「宗教の存在価値，文化主義の問題点，解説・略年譜」，学術出版会，2010 年。

デューイ，永野芳夫訳・大浦猛編『倫理・社会・教育：北京大学哲学講義』（中国語からの和訳），飯塚書房，1975 年。

Robert Cornell Armstrong, *Just Before the Dawn: The Life and Work of Ninomiya Sontoku*, New York: Macmillan Company, 1912.

Jeremy Bentham, *A Fragment on Government and an Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, originally published in 1789. ベンサム，関嘉彦訳「道徳および立法の諸原理序説」。ベンサム他『ベンサム J.S. ミル』（関嘉彦責任編集），中央公論社，1979 年，収録。

John Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, 1920. 中島慎一訳『哲学の改造』，岩波書店，1921 年 4 月。千葉命吉訳，同文館，1921 年 12 月。清水幾太郎・清水礼子訳，岩波書店，1968 年。河村望訳『哲学の再構成』（デューイ＝ミード著作集，第 2 巻），人間の科学社，1995 年。

John Dewey, *Lectures in China, 1919-1920*, translated from the Chinese and edited by Robert W. Clopton and Tsuin-Chen Ou, Honolulu: University Press of Hawaii, 1973.

- George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*. Southern Illinois University Press, 1974. G. ダイキューゼン著, 三浦典郎・石田理訳『ジョン・デューイの生涯と思想』, 清水弘文堂, 1977 年。
- Aiko Ikeo ed., *Economic Development in Twentieth Century East Asia*, Routledge, 1997.
- Aiko Ikeo, *A History of Economic Science in Japan: The Internationalization of Economics in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2014.
- William James, *Pragmatism, a new name for some old ways of thinking, popular lectures on philosophy*, 1907. ジェイムズ, 榊田啓三郎訳『プラグマティズム』, 岩波書店, 2010 年。
- Liu Qui, 'The "New Education" and Chinese Revolution in the 1920s', in Ikeo ed., *Economic Development in Twentieth Century East Asia*, chapter 6, pp. 66–84, Routledge, 1997.
- J. S. Mill, *Utilitarianism*. Originally published in 1861. J. S. ミル, 川名雄一郎・山本圭一郎訳『功利主義論集』, 京都大学出版会, 2010 年。
- J. S. Mill, *Principles of Political Economy: with some of their applications to social philosophy*. London: J.W. Parker, 1848. The seventh edition, 1871. 末永茂喜訳『経済学原理』全 5 巻, 岩波書店, 1959–63 年。
- J. S. Mill, *Principles of Political Economy*, abridged, with critical, bibliographical, and explanatory notes, and a sketch of the history of political economy by J. Laurence Laughlin, New York: D. Appleton, 1884. 天野為之訳『高等経済原論』, 富山房, 1891 年。
- Sharon Hamilton Nolte, 'Industrial Democracy for Japan: Tanaka Ōdō and John Dewey', *Journal of the History of Ideas*, 45 (2): 277–294, 1984.
- Sharon Hamilton Nolte, *Liberalism in Modern Japan: Ishibashi Tanzan and his Teachers, 1905–1960*, University of California Press, 1987.
- Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Liberty Press, 1982. Reproduction of the edition published by Oxford University Press in 1976 and reprinted in with minor corrections in 1979. Originally published in 1759. 村井章子・北川知子訳『道徳感情論』, 日経 BP 社, 2014 年。
- Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Two volumes, Liberty Press, 1981. Reproduction of the edition published by Oxford University Press in 1976 and reprinted with minor corrections 1979. Originally published in 1776. 山岡洋一訳『国富論』上下, 日本経済新聞出版社, 2007 年。
- Jessica Ching-Sze Wang, *John Dewey in China: To Teach and to Learn*, State University of New York Press, 2007.